名所物見の旅　其の伍拾肆　不動湯温泉

隠れ里の旧家の屋敷のような風格を持つ不動湯温泉。宿には高村光太郎、智恵夫妻が昭和八年に泊まった時の宿帳が残っている。

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

かれこれ三十分は探し回っただろうか。コケシの里として有名な土湯の温泉街を何度も行ったりきたりしているが、目的の不動湯温泉への道路標識も案内看板もなく、途方にくれていた。地図をみても不動湯温泉の入口はよく分からない。福島駅から安達太良山方面に向かい、土湯温泉から不動湯温泉へ入るとのことだったが・・・。土湯観光案内所を見つけたので車を止め、相棒が不動湯温泉への道を聞きに入った。

車に戻った相棒によると「不動湯温泉に行きたいのですが」と尋ねたら、カウンターの向こうに座った案内の男性は一瞬ニヤッと笑った後、丁寧に行き方を教えてくれたという。不動湯温泉の入り口は土産物屋などが並んだ一角の細い道で、これではわかるはずもない。道はすぐに急坂になり、雪深いこの季節には４ＷＤ車でなければとても入ることはできないであろう。

それにしても・・・、その人はなぜ笑ったのか。不動湯温泉についての事前知識はまったくなく、山の中の一軒宿という謳い文句に惹かれて予約を取ったのだが、何かとんでもない温泉じゃないかと不安になってきた。

北は米沢、東は福島と二本松、西は喜多方、南は猪苗代に囲まれた磐梯朝日国立公園のこの一帯は、天元台、吾妻山、一切経山、安達太良山、磐梯山などが連なり、その周囲には温泉がざっとみても四～五十箇所は点在している。前回の春は一切経山に登って野地温泉や新野地温泉に浸り、鷲倉温泉に泊まった。今回は二月の厳冬期なので登山は割愛して、温泉だけを楽しむつもりで来たのであった。

森に囲まれた雪道を慎重に進むとやがて広場に出て、何台か車が止めてある。そこから深い雪道を歩いて行くと、すぐに隠れ里の旧家の屋敷ような木造の大きな建物が現れた。玄関には古びた文字で不動湯温泉と書かれた看板が掛かっている。うーん、なんとも言えないこの渋さ。100パーセント私好みの温泉じゃないか。不安は吹き飛び、うれしくなって飽かず眺めた。通された部屋は昭和三十年代を彷彿させるような造りで、外の雪景色を映す木枠の窓などは小津安二郎の映画の場面を見ているようだ。子供の頃泊まった宿はどこもこんなだったと思い出し、懐かしさがこみ上げてきた。温泉宿というものはこうでなくてはだめなのだ。小綺麗なホテルでは温泉情緒ってものがまるっきりないからなぁと一人悦に入っていたが、しかし・・・まてよ。不動湯を予約した際、「旧館にしますか、新館にしますか」と聞かれ、相棒は確か「新館でお願いします」と言っていたはずだ。この部屋は気に入ったけど、どうみても旧館ではないのか。宿の人が間違えているといけないので、他の部屋の様子を調べにいくと、我々の建物とつながった先に、床や柱が黒光りするほど年季の入った古い建物がある。比べてみれば一目瞭然、我々の建物のほうが正真正銘の新館だ。旧館は廊下の襖を開けると部屋の中は丸見えで、プライバシーも何もあったものではない。時代劇に出てくる宿のようで、まるで水戸のご隠居一行が泊まっているような雰囲気があり、旧館にすればよかったかなとちょっと悔やんだ。

開け放たれた部屋にはいかにも温泉マニアらしき物知り顔したアラフォーグループ、大学生男女グループと品の良い教授らしき人物、お決まりの外国人温泉探訪グループなどなど、秘湯と呼ばれる宿に巣食う典型的な連中が見事に集結している。土湯温泉観光案内の男が見せた一瞬の笑いのわけがわかったような気がした。我々もそれら秘湯マニアの末席に連なる人間と見られての含み笑いであったのだろう。

さて湯のほうはというと、宿泊棟から長命階段と呼ばれる長い廊下を川原に向かって下っていくと、常盤の湯（単純炭酸鉄泉）、羽衣の湯（単純泉）、婦人の湯（単純泉）、貸切風呂（弱硫黄泉）の内湯がある。八十段ある階段の廊下を下りきって屋外に出ると、混浴の小さな露天風呂（硫黄泉）がポツンとある。寒中で服を脱ぐのは辛かったが、露天風呂から眺める雪の渓谷はとても素晴らしい。

宿の夕食は山の中とは思えぬほど充実したもので、侘しい食事を予想していたが大違いの満足度であった。牛肉の陶板焼きをメインとして、食前酒は山ぶどう酒に山菜の天ぷら、岩魚塩焼き、葱ヌタ、ナメコおろし、鯉の洗い、海老入り揚げ出し豆腐、水菜、そしてイチゴとキウイのデザートまで付いている。しかも部屋食で、頭に手ぬぐいをかぶった背の高い若者が、膳を運んだり世話を焼いたりしてくれた。広間で他の客と一緒に食事をするのは気詰まりだという人にとっては、部屋食は気兼ねなく食事を楽しめるので好評だという。私は他の客と話をして情報を得るのも悪くないと思うが、変な奴に雰囲気をぶち壊されるのはやはり嫌なものである。

夕食を堪能した後、食事の後片付けにきたくだんのお兄さん、飲みきれなかった私の大瓶ビールを持って、「あっ、まだ残っている」と驚いている。単価の高いビールを残すなんて信じられないといった面持ちである。この男、相当の飲兵衛であろうと私は睨んだのであった。

不動湯温泉は平安時代の「吾妻鏡」にも登場する歴史ある古湯で、昭和八年には高村光太郎、智恵夫妻も訪れている。風呂がどれも小さめなのが玉に瑕だが、これもかえって秘湯らしい雰囲気を醸し出している。今度はぜひ水芭蕉が咲き誇る初夏に、山歩きも兼ねて再訪したいと思うのだった。

土湯温泉から徒歩三～四十分、車なら十分ほどで森の中にひっそりと建つ不動湯温泉に到着する。

宿と温泉を繋ぐ長命階段。ギシギシ軋む階段を下っていくと四箇所の内湯と、渓谷の眺めが素晴らしい「谷間の露天風呂」がある。